

秋建時報

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

秋建時報

平成26年5月1日(第1240号)



発行／(社)秋田県建設業協会
秋田市山王四丁目3番10号
TEL 018(823)5495
FAX 018(865)2306

協会

今年度第1回の 理事会を開催

決算及び予算を審議

秋田県建設業協会及びその関係5団体
※は4月25日に理事会及び総会を秋田
キャッスルホテルで開催し、各団体にお
ける25年度決算・26年度予算を審議し
た。

秋田県建設業協会の理事会において
は、決算・予算のほか、26年度協会表彰受
賞者承認の件、常置委員会委員の変更な
どが審議され、原案通り可決された。



議 事

- | | |
|-------|--------------------------------------|
| 第1号議案 | 平成25年度貸借対照表及び正味財産増減計算書及びこれら附属明細書承認の件 |
| 第2号議案 | 平成25年度事業報告及び事業報告の附属明細書報告の件 |
| 第3号議案 | 平成25年度公益目的支出計画実施報告書の件 |
| 第4号議案 | 平成26年度事業計画並びに収支予算報告の件 |
| 第5号議案 | (一社)秋田県建設業協会表彰受賞者承認の件 |
| 第6号議案 | 常置委員会委員の変更承認の件 |

※関係5団体

- ・秋田県建設事業協同組合連合会
- ・建設業労働災害防止協会秋田県支部
- ・秋田県森林土木建設業協議会
- ・秋田県土木施工管理技士会
- ・秋田県土地改良建設協議会

協会

協会人事

新任 (一社)北秋田建設業協会
次 長 渡 部 整 悦

職名変更 (一社)秋田県建設業協会
雇用改善コンサルタント → 事業推進員
菊 池 徹
(平成26年4月1日付け)

秋田・鉄 路の情景

Vol.
18

「カラフルな鉄道車両」

E653系特急いなほ



文と写真／加藤隆悦

フリーカメラマン兼フリーライター
取材・執筆歴／旅の手帖、WoodyLife、
ベンチャー・リンク、郷、あるる他
海外取材歴／ドイツ、アメリカ、ブラジル
写真塾・写楽 主宰／写真教室、撮影ツアー
企画等

秋田と新潟を結ぶ羽越線の特急いなほは、昨秋から順次新型車両に切り替わり、現在は一日三往復の列車がすべて新型で運行されている。(この他にいなほには新潟～酒田間の列車もある)

新型と言っても、まっさらの新製車両ではなく、実は“おさがり”。上野発着の常磐線の特急として走っていた電車が、太平洋岸の路線から日本海側の路線に転属になってきたのだ。転属に際していろいろ手を加えられたので見た目はピカピカで、まさに新車同然ではある。

昨今はこのいなほのように、カラフル(というか、いささかにぎやか)な外観の鉄道車両が増えていく。いなほの外観は人によって好き嫌いがあるかもしれないが、日本海の夕陽や波をイメージした曲線を多用したデザインで、実に派手派手しい。このようなことが出来るのも、車両の外装を、従来のように塗装ですべて仕上げるのではなく、あらかじめ印刷を施したフィルムを車体に貼っていく、いわゆるラッピングという手法が普及してきたことによる。

工期の短縮、デザインの柔軟性、必要があれば簡単に新しいものに貼り換えられることなど、ラッピング外装のメリットは多いが、デザインの柔軟性に頼りすぎて、漫画のキャラクターを車体いっばいに描いたものなど、いささか度が過ぎているのではないかと思わされるものもある。一時的なブームなのかもしれないが、あまりごちゃごちゃしてものにせず、すっきりと目にも鮮やかで、旅が楽しくなるようなデザインを、施してほしいものである。

ラッピング車両といえば、このコラムの前回で写真を掲載した由利高原鉄道の宇宙戦艦ヤマトのラッピングを施した車両も3月で運行を終え、4月からは別の漫画の登場人物をあしらったラッピング車両に生まれ変わった。こちらままるで新車のようにピカピカだし、明るく可愛いデザインでコミックファンのみならず女性にも喜ばれそうだ。乗客増にも貢献するのではないだろうか。

“秋田おぼこ”と “薩摩おごじょ”

菅 禮子

“おぼこ”と“おごじょ”——どちらも、その土地の女性のこと。娘という意味が強い。

いわば日本列島の北の端と南の端の娘——はるかな距離をへだてて、それぞれの地に生まれ育ったおぼこの私とおごじょのSさんの二人はどこで出会ったのか？……

京城女子師範学校尋常科というのは、かつて現朝鮮半島ソウル(その昔は京城ひいじょうと言った)の地にのみ存在した学校で、三千名の志望者から選び抜かれた一学年百名、そのうち六十名が現地人。四十人が日本人だった。

ここで四年間の修行期間を経て、判任官待遇の小学校教師の資格を与えられる。

おぼこの私は一組の級長(当時は生徒分隊長と呼ばれていた)、おごじょのSさんは二組の級長だったが、しかし、在学中お互い話をする事もなかった。

わたしが彼女のことを意識したのは、戦後日本本土に引き揚げてからである。それは、かつての級友の噂によると、おごじょ即ち彼女の引き揚げ先は九州南端の鹿児島県、薩摩である。薩摩で母親が心労で倒れた時、おごじょことSさんは十六歳。十人の大家族をひとりで切りまわしたという。

この話はわたしを痛く感動させた。十人の家族をかかえて家の中を取りしきるなど、すべて親まかせ、女中まかせのわたしには、逆さになってもできない話だった。

話とはぶが、朝鮮半島から家族と共に引き揚げて、秋田師範に転入した時、今にもぶっ倒れそうな灰色の、古びた木造校舎の中には、あくまで色白く、肌目細かくすべすべした肌、しかも十分に栄養のゆきわたったがっしりとした体格の乙女たちに溢れていて、まさに百花繚乱さながらお花畑という趣だった。

秋田にはおののこまち“小野小町”という美女代表が存在する。百人一首にも登場している。

かつて生前の司馬遼太郎さんが『現代おに於いて“女性の美しさ”について「〇〇美人」と名を冠せられるのは秋田しかない』と言われ、また書いてもおられるが、“美しさの代表”としての“秋田おぼこ”はさておいて、日本の国でなに

かの代表として存在する女性がほかにあるだろうか？

ここに薩摩の女性達が浮上してくる。薩摩の女たちは、男たちより強かった。その代表的存在として、嫁に履物を揃えさせた島津の奥方がいる。(嫁—閑院宮)

その権高さ！ 神経の凶太さ！

秋田おぼこの“美しさ”に対して、これは薩摩おごじょの“強さ”であろう。

その末裔のSさんがはるばる秋田にやってきたことがある。東大を出た息子さんが秋田の出先(大曲)に赴任したため、身のまわりの世話を訪れたという。

わたしは“負けた！”と思った。十人の大家族の世話を十六歳でやってのけ、しかも息子を東大に入れたSさん、薩摩おごじょの面目躍如！たるものがある。

ご子息のお嫁さんとして、いいひとがいるというので、面接にはるばる鹿児島からやって来てついでに旧友のわたしとも会ったのであった。

折柄、千秋公園の池には蓮の花が咲き、土手はサツキが紅く真っ盛りであった。

もし、秋田おぼこと薩摩おごじょが闘ったとしたらどちらが強いか？…… 美しさのみ取り上げられた秋田おぼこだが、存外強いのではなからうか？——それと……。

秋田師範に転入した頃の、窓辺に倚った二人のおぼこのこんな会話を耳にしたことがある。

「カジンスキーはよォ……」

知的なものに対する憧れがそこにはあった。

わたしはその泥臭さを、苦笑と共に聴いた。

知的となると、ここに会津の女が登場してくる。

津田梅子、吉益亮子、永井繁子、上田梯子、山川(大山)捨松、この五人は明治四年に政府派遣の留学生として渡米しているが、この中で山川捨松は会津の出身であった。

ところで、“秋田おぼこ”は今後どのような途を選べばよいか——

“わたしは美人ですよ”と器量におごらずに“美の感覚”を磨くこと。薩摩おごじょのような結集力を持つこと。ユーモアに裏打ちされた豊かな表現力を持つこと。無駄なプライドは捨てること等々。

要するに真のプライドを持つことだと思いがどうだろう。